

2012年度立命館大学校友会 東日本大震災復興支援事業 東北応援ツアー レポート

D 福島県会津東山温泉コース

氏名 渡辺 正人 (1973 経営学部卒)

□我々のグループは、10/27日 13:00に JR 郡山駅に集合、駅前では丁度『復興に向けて歩み続ける福島で』をキャッチフレーズにふるさとの元気を体感する『ふるさとの祭り2012ー福島大会』全国の祭りが福島に集結して華やかな音楽と踊りが開催されていた。少しは地元の方々に元気が、そして周りを見渡す限りにおいては震災の爪痕を垣間見ることはなかった。

だが駅前周辺以外は、東北人の粘り強さであろうか、建物・

家屋には華やかさはなく、いやじっと耐え忍んでいるようにも見える景観もあった。

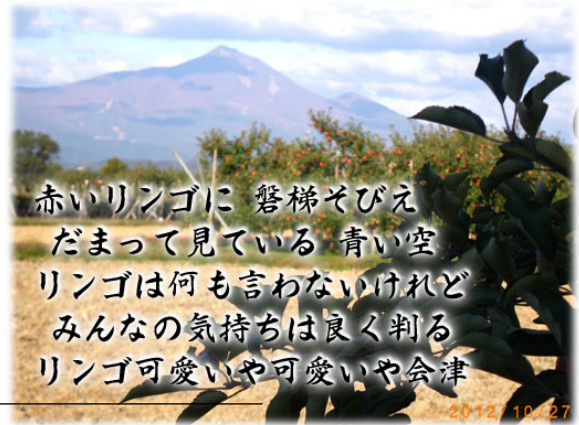
サトウハチロー作詞：編 M.W

我々のバスは一路、悠然として色付いた会津磐梯山の姿を横目に高速で会津若松へ。途中の中学校のグラウンドでは土壤汚染の除去作業が行われているのも目の当たりにし、搬出先がなくグラウンドの片隅に留置されてあるのも見られた。

その後、校友の福島県人会の方々待ち受けられ、お世話頂いた今回の我々のテーマである【風評被害】について側間・体感する場所へと移動。最初は赤くたわわに実ったリンゴ園へ。何ら変哲もないように見えるが、去年は出荷停止のため全てのリンゴを穴に埋め廃棄したと聞き、生産者の方のやりきれなさを痛感。そして、今は【風評】に悩まされ、少しは回復しつつあるが、やはり客足が伸びて来ないとしみじみと語られるご主人の姿。試食を勧められる中、リンゴの赤さが強烈な印象に残ることに。少しでも留守宅に電話して「りんごは？」の問いに対し「遠慮して」の返答。それが本当なのかも知れないが、何か複雑な気持ちになる。

反面、次に紹介された野菜農家の方々の力強さー今のままでは誰もついて来ない、自分達が先頭に立って明日を何とかしなければの姿(特に女性の方々)、他人を頼ってはいけない前向きな気持ちと行動を見て、自分であればどうするのであろうかと自問するが、そのことに遭遇しないとやはり答えは出ない。結局は我々が日常に戻れば、何ら関わりがないとする態度・目先の日常の行動が、復興・絆と言いながら本来の回復を遅らせているのではないだろうか。前もって準備頂いた[手作りの芋煮ときな粉餅]が本当に美味しかった。

やはり、巨大な怪物【原子力】に対する安全神話のみで抜本的な解決が見出されていないのが実情なのではないだろうか。福島県人会の方々の本音として、今回の原発被害で誰一人告発されず、誰一人逮捕されていないとの憤りを交えた言葉を聞くにつけ、やるせなさのみではなく未来の子供達への道筋・回答を早急に見出す必要があるのではないだろうか。今日の新聞記事にも[あんぼ柿]が2年続けて廃棄される写真が、我々は当事者ではないと言う対岸の火事で済まして良いのであろうか。



福島県の校友の方々と夜まで一献を交わしながら語り合い翌朝のバスの見送りまでして貰う姿には、感謝と、同じ立命人としてより『絆』を大事にしなければの気持ちを痛感する今回の参加であった。 2012, 11, 15

最後に今回のお世話を頂いた関係者の方々のご尽力にお礼を申し上げます。